日常短編：東雲なの×阪本さん

羅月　-Ragetsu-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日常短編：東雲なの×阪本さん

【Ｎコード】
Ｎ０５０４Ｖ

【作者名】
羅月　－Ｒａｇｅｔｓｕ－

【あらすじ】
『日常』より東雲パート、今回は少し静かな日常の一場面を描写してみました。

（前書き）

本当はゆっことくりむ会長（生徒会の一存）を絡ませたらどんなカオスな事になるかを模索していたのですが（声優同じだし）、無難なラインに落ち着きました。

＞ｉ２７６６３―３５８７＜

俺様は猫である。名前はまだない。

と言う路線で孤高に生きようと決めていた俺様だったが、最近阪本と言う名前を勝手につけられて非常に迷惑している。

降ってわいたような段ボールに書いていたからって安易な考えが通用するほどこの世の中は甘くない。

しかも俺様は人間で言えば成人の域にまで達している。たかだか八歳児と一歳児にどうのこうの言われる筋合いは毛頭ないのである。

『あっ、阪本さ～ｎ……あ痛っ！！！』

陽の光に程良く温められたコンクリートの上をずんずん歩いていると、東雲研究所で作られたどうやらロボらしい世話役娘、東雲なのに出会う。今日も歩きにくそうな下駄を履いてやっぱり俺の目の前で転んだ。右足の鼻緒が切れている。転んだ原因は道端に素朴に落ちていた石ころらしい。

おいおいと思いながら俺はなのに駆け寄る。ロボのくせに無駄に人間性を追求されたこの娘は見ていて本当にひやひやする。あうぅと呻きながら足をさすっている。

そんな中でも買い物の手提げを一番に庇っているのだから流石だ。

きっとあの中にはガキの好物であるプリンや、夕食でいつもガキが催促するオムライスの為の卵やケチャップ、俺の最近のトレンドであるネコ缶等々が入っているのだろう。

とあっては放っておく訳にもいかない。

『お前も大変だな～……』

『ううう、すみません……』

『ガキに言ってバランスを鍛えてもらったり力仕事を楽にこなせるように改造して貰うとか出来ないのか？』

『それはちょっと……あっ、はかせっ！！！』

ダボダボの白衣に身を包んだ八歳児、なのは『はかせ』と呼んでいるガキが前方からやって来た。口元にクリームがくっついている。また勝手に冷蔵庫の中身をつまみ食いしやがったなこのガキは。

『なの、どうしたの？』

『あ、ちょっとまた転んでしまって……』

『あうう、痛そう……あっ、何買ったか見せて～』

表情のころころ変わるやつだ。さっきまでこいつを心配するそぶりを見せていたのに次にはもう別の所に興味が変わっていやがる。

だが……ガキは別段喜ぶでも無くかごの中身をまさぐる。そしてそれを一通りやり終えると、恐らく8歳のガキにはかなり重いだろうかごを両手で持ち上げた。

『これはわたしがセキニンを持って家までもちかえるんだけど』

『あっ、はかせっ……あうう、痛いですぅ……』

『ま、プリンがぬるくなるからな……』

別に俺は食べた事は無いが、冷蔵庫でしっかり冷やしたのがあいつ的には美味いらしい。それがこの陽気に当てられ酷い事になるのは確かに避けたい所ではあるのだが……

『はかせ……』

『ん、どした？』

『また、私は迷惑をかけてしまったみたいです』

悩ましげな表情は日常茶飯事だが、悲しげな表情は普段はあまり見ない。まあ悲しみにくれている暇なんぞ無いのだろうが。

『迷惑って……あのガキは冷蔵庫に余ったケーキを平らげて、まだ足りないからってわざわざやって来たんだろ』

『いいえ、違いますよ。私、実は買おうと思ってた物が売り切れだったんで普段は行かない所に買い物に行ってたんですよ。そのせいで遅れてしまって……心配してくれたんです、はかせは』

心配、ね……嘯く口元に風が吹き抜ける。こんな所で何を話しているんだか。

『だから、かごの中見て、自分が持てるか確かめてたんですよ。プリンよりも私を大事に思ってくれているから、何も言わずに、喜ぶより先に……』

『考えすぎじゃないのかねぇ。ま、自分の作ったロボだしな……大事にするのも分かる気がするが』

『そう、ですよね……私ははかせに創っていただいたんですから。もっと頑張らないと、はかせが素晴らしいって事が霞んでしまいます』

顔を赤くしてほほ笑む（どうやってそんな機能を搭載したのやら）なのは何だかとても生き生きとしていた。

『仕方ない……ほら、俺のスカーフ使って鼻緒の代わりにしろ』

『え、でも……』

『あのガキならまた作れるだろ。それに……俺らに言葉なんて要らない、じゃないか？』

『阪本さん……』

俺の言葉が人の言葉として発せられる（一体どうやって作ったかは知らないが）赤いスカーフを外し、下駄の鼻緒の代わりにしてやる。ふう、大分軽くなった。あれはスカーフじゃ無いな、よくよく考えたらただの布であるわけが無いのだ。何か機械が組み込まれてるのだろう。

『あっ、うまく行きましたよ阪本さんっ』

『そうか、良かったじゃねぇか。さて、そろそろ帰るとするか』

『はい、そうですね……』

『『あれ？？？？』』

（後書き）

オチもほんわかです、こう言う特に山もオチも無いような話もたまには書いて行きたいですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0504v/

日常短編：東雲なの×阪本さん

2011年9月30日13時59分発行